水戸岡 鋭治氏

ドーンデザイン研究所代表

◉ プロフィール　みとおか・えいじ

1947年岡山県生まれ。岡山県立岡山工業高等学校卒業。大阪のデザイン事務所勤務、ヨーロッパ遊学を経て、72年ドーンデザイン研究所を設立。イラストレーション、家具や建築などのデザインを手がける。88年、福岡市の「ホテル海の中道」のアートディレクション担当をきっかけに、JR九州の列車デザインにも取り組み、「つばめ」「ソニック」などの特急列車や九州新幹線のデザインで注目を集める。さらにローカル線や路面電車、バス、駅舎を含めた街づくりへのアプローチを通して、全国の地域活性化に貢献している。

最後の1%の仕事で多くの人を喜ばせる

宮坂　水戸岡さんはこれまで家具や建築物、鉄道、公共施設などさまざまなデザインに携わってこられました。なかでもJR九州をはじめとする列車デザインの第一人者として知られています。ものづくりに取り組む当社として、水戸岡さんのデザインへの思いや物事を成し遂げるポイントなどをお伺いします。昨年は「ななつ星・in九州」で、1994年の「つばめ」以降、ご自身のデザインで5回目の「ブルネル賞」(※)を受賞されました。おめでとうございます。

水戸岡　ありがとうございます。この賞は先端的でモダンな技術の追求が理念の根底にあります。オリエント・エクスプレスを再生させるような、クラシカルなコンセプトでは受賞できないと思っていたので大変光栄です。

宮坂　その車両の動揺防止制御装置に、当社のアクティブサスペンションをご採用いただいていますので、私たちも大変うれしく思っています。安全性や耐久性はもちろんのこと、揺れを抑え、快適な走行に一役買っていると自負しています。

© JR九州

情熱と経験知で新たなものを生み出し、感動を呼び起こす

建築物や公共施設、鉄道のデザイナーとして人々に夢を与え、感動を生む仕事を続ける水戸岡鋭治氏。2013年10月に運行を開始したJR九州のクルーズトレイン「ななつ星in九州」は、その優美なデザインと、贅の極みを尽くした快適な旅で、半年先まで予約で満席になるほどの話題を呼んでいます。今回の技術対談では、人の心を動かすデザイン哲学や、ものづくりへの情熱、素材への思いを伺うとともに、若い技術者へのメッセージをいただきました。

新日鉄住金（株）代表取締役副社長
宮坂 明博

800系新幹線のデザイン画

当社のアクティブサスペンションが採用された「ななつ星in九州」のラウンジカー　© JR九州

「ななつ星 in 九州」

※ブルネル賞
1985年、欧米を中心とした鉄道関連デザイナー、建築家らによって構成されるワトフォード会議が創設した、鉄道関連の国際デザイン賞（2～3年ごとにコンペを開催）。

また鉄道関連製品では、当社は直線性に優れ、スムーズに走行できる150メートルレールの出荷体制も整えました。レールの継ぎ目を減らし、現場での線路保守作業の軽減に加え、一層の軌道安定化を図り、これからも、縁の下で支えていきます。

水戸岡　それは知りませんでした。僕は鉄道の足回りの技術には詳しくありませんが、言うまでもなく、鉄道にとって車輪・台車や線路の安全性、快適性は最も重要です。僕が参加するのは、そうした足回りや、踏切、橋、ホーム、駅舎など「99%」が出来上がったあとの、人が入る車両の居住空間、いわば「1%」の部分です。

宮坂　それがお客様の心を惹きつけます。そこにデザインの力がありますね。

水戸岡　私たちがきちんと仕事をして初めて、それまでの99%の仕事が報われる。大きな責任のある仕事です。私たちがヒットを打って1%が光ると、そのプロジェクト全体が脚光を浴び、それぞれの専門性を持つ多くの人たちでつくり上げたことを改めて社会に認知してもらえます。

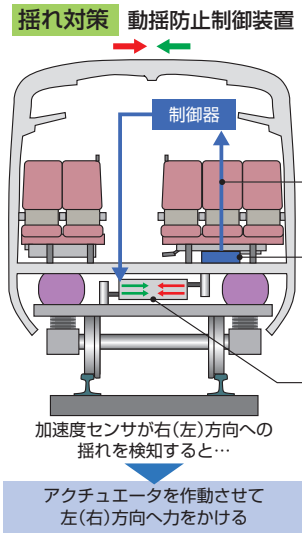
すべては出会いから。人に支えられて独立の道を選ぶ

宮坂　デザイナーとしての水戸岡さんの理念や活動を知る上で、まずデザイナーを志望されたきっかけについてお聞かせください。

水戸岡　実家が家具製造販売業を営んでいました。子どものころ絵が好きで習っていましたが、小学6年生のとき、父が持っていた契約関連の資料にあった船の内装の完成予想図(パース画※)を見て、自分が好きなのは絵画ではなく、こういう絵なんだと確信しました。それは将来入社するデザイン事務所が制作したもので、まさにデザインの世界でした。自然な流れで工業高校の工業デザイン科に進学し、実家の家具の運搬からデザインまでも手伝うようになり、卒業後は「丁稚奉公してこい」と父に勧められて、パース画に衝撃を受けたそのデザイン事務所に入社しました。

宮坂　入社後はどのような仕事をされたのですか。

水戸岡　新人としてまず、メーカーから集めた床や壁、天井、家具、風呂などの素材を5センチ角に切って、船などの室内図に合わせて手作業で貼り込むサンプル帳の制作から始めました。インテリアに使う素材をはじめ、色指定や形状デザインなどの基礎を学び、色や形や素材を使って空間を生み出す現在の仕事の礎となっています。



アクティブサスペンションの仕組み

アクティブサスペンション
車体を支える左右の空気ばねの間に設置したアクチュエータ(駆動・制御装置)で横揺れを低減。センサーで揺れを検知し、コンピュータで振動を制御している。

※パース画
パースはperspectiveのことで、遠近法、透視図法の総称。パース画は、建築物などを建造前にイメージとしてとらえるため、三次元で描いた絵。

出荷を待つ当社の150メートルレール

小学生のときに見た、船の内装の「パース画」(カラースキーム)。のちに入社したデザイン事務所で、カラーサンプルづくりの後に水戸岡氏が着彩した

宮坂　その後、イタリアをはじめヨーロッパを2年間巡り、帰国後25歳で独立された。相当思い切った決断だったのではありませんか。

水戸岡　どうしても岡山の家業を継ぐ気になれず、「一生デザインを手伝うから」と言って弟に継いでもらいました(笑)。僕は出会いに恵まれているんです。イタリアのミラノでご縁ができた日本人の方々を順番に訪ねるなかで仕事をもらい、一人で事務所を始めることができました。そのときに今の「ドーンデザイン研究所」の名刺をつくりました。この名刺のデザインは一生変えないつもりです。

宮坂　水戸岡さんの著書で拝見しましたが、小学校3年生のとき、先生が何かの拍子に「ドンジ」と呼んだのをきっかけに「ドンちゃん」というあだ名がつき、それが社名の由来となったそうですね。

水戸岡　僕は体操と絵の時間だけ元気で、ふだんは無口で勉強ができませんでしたからね。歳を重ねるうちに、高校まで呼ばれ続けたニックネームを大事にしたいと思いました。ヨーロッパだと〝ドン(Don)〟は貴族で偉そうだけど、ドーンは響きがいいし、独立するタイミングだったので「よーいドーン!」でいこうと。それに英語だと〝夜明け(dawn)〟で、カッコいいなと(笑)。

いいものをコピーし取り入れ進化させる。そこに個性が生まれる

宮坂　その後、大きな飛躍のきっかけとなった「ホテル海の中道」の仕事は、どのような経緯で引き受けられたのですか。

水戸岡　独立後、カットやイラスト、百科事典の挿絵や、マンション・住宅のパース画を描き、建築の勉強もしました。「パース画で日本一になれ」という仲間の声に押され、手間暇かけて描いたイラストをまとめた本を出版したあとは、仕事も全国規模となり、スタッフもあっという間に8人になりました。そんなあるとき、九州の不動産会社から突然「すぐに現地に来てほしい」と依頼があり、その押しの強さに負けて、博多湾を望む雁ノ巣の建設現場に行き、担当者と会いました。初対面にもかかわらず、その場でホテルのデザインを引き受けました。それがリゾートホテル「ホテル海の中道」です。経験がなく自信もないけれどやりたいという強い気持ちで、内装から食器などの備品、広告まですべてを見るアートディレクションを担当しました。ちょっと出しゃばった行為が自分の領域を広げてくれると感じましたね。

宮坂　そのプロジェクトの縁でJR九州の列車デザインを手がけることにつながったのですね。

水戸岡　JR九州では、ホテル海の中道に行く香椎線に、リゾート列車を走らせる構想を持っていました。僕が四苦八苦して完成したホテルのオープニングパーティーで、JR九州初代社長の石井幸孝さんを紹介され、その後、リゾート列車のデザインを提案する機会を得ました。それが「アクアエクスプレス」です。僕は覚えていないのですが、パーティーで「日本の鉄道って不細工ですよね」と言ったのを、生意気なやつと思いながらも覚えていた石井社長は、「失うものは何もない、水戸岡は列車デザインを知らないが故に思いきったことをやれる」という期待もあって、僕の提案を採用した。その提案は、メンテナンスのしにくさから当時タブーだった白で古い車両を再生させたものでしたが、石井

水戸岡氏の大きな飛躍のきっかけとなった「ホテル海の中道」(87年)で、ご自身が描いたポスター(右)と、ホテルのプロジェクトが縁で、デザインを提案し採用されたJR九州香椎線のリゾート列車「アクアエクスプレス」(88年)

さんに予算・スケジュールを守ることを前提に、「色や形はすべて任せる。社内から異論が出ても俺がつぶす」と言ってもらったことが力になりましたね。選んでいただいた恩に報いるためにも、絶対にヒットを打たなければと思いました。

宮坂　一生懸命に努力されてきたからこそ、新たなステージにつながるチャンスをものにできたのでしょう。ピンチヒッターで三振が続くとその後使ってもらえませんが、ヒットを打てばまた次のチャンスが巡ってくる。やる以上は必ずヒットを打つという気概を感じます。その後のエポックメイクは1992年に運行開始した787系特急「つばめ」です。最初なかなか提案が通らずご苦労されたと伺っています。

水戸岡　どういうデザインが良いのか自信が持てなかったので、いったん冷静になって世界の鉄道を見てみると、TGV(フランス)、ICE(ドイツ)など素晴らしい車両がたくさんあった。そこで世界中の鉄道のいいとこ取りをしようと考えました。それまではデザインには「自分の個性」があると思い込んでいましたが、それは間違いだった。まず世界にあるいいものをコピーし、いかに自分の中に取り込むか。コピーするからには、それを進化させたものを生み出さなければなりません。TGVをベースに自動車のデザインまで取り入れて考え抜いた提案で決まりました。

宮坂　そこでは長旅での食事の重要性も訴求して、ビュッフェの導入を実現されるなど、移動する手段ではなく移動する時間を豊かにするという、利用者の立場に立った水戸岡さんの「デザインは公共のために」という理念が具現化されていると感じています。

考え抜き、手間暇かけて夢を描く「ななつ星in九州」

宮坂　「ななつ星in九州」は、3年半ほど前にJR九州の唐池恒二社長(現会長)が水戸岡さんに言われた「九州を一周する豪華観光列車をつくりましょう」という言葉がきっかけで、具体的にデザインを考え始めたと伺っています。

水戸岡　その言葉が頭に焼き付き、しばらくして自分で絵を描いて唐池さんに見せました。JR九州社内の議論はあったものの、唐池さん自らが採算を検証した結果やることが決まりました。僕も正直なところ不安でしたが、まだ車両が形にもなっていない、運行開始の1年前の予約販売が7倍の競争率でした。今の時代に夢のような「鉄道のロマン」を買う人がいるということに驚きましたし、日本も捨てたもんじゃ

787系「つばめ」のデザイン画(上)と実物

800系新幹線

ないと思いましたね。

まずはヨーロッパの豪華列車オリエント・エクスプレスを徹底的に研究し、日本流、九州流のオリエント・エクスプレスをつくろうと決めました。99%を占める線路、足回りなどのハード面、システムなどは、世界トップクラスの日本流でいけます。

宮坂　1%である居住空間についても、水戸岡さんはメーカーや職人など多様な人と協業して、そのコンセプトの具現化に取り組まれます。どのように進められたのですか。

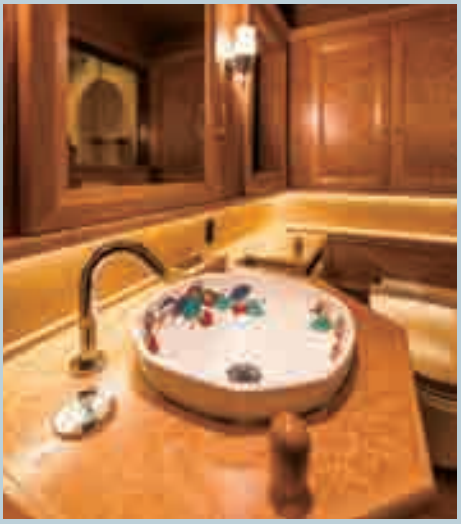
水戸岡　オリエント・エクスプレスでは有名な作家のガラス製品がちりばめられ、随所にヨーロッパ様式が入っており、それが豪華さを醸し出している。それに匹敵するものを考えた末、九州の誇りである有田焼の採用を決めました。三右衛門(※)を訪問し、協力をお願いするなかで、十四代酒井田柿右衛門さんに「ぜひプロジェクトに参加したい」と言っていただき、目玉である洗面鉢を焼いていただきました。その後、柿右衛門さんは亡くなり、僕らがいただいたものが遺作となりました。もう一つは、やはり九州の組子職人の障子と欄間。こういう技のある質の高いものを車両のような公共空間に入れて、誰でも見られるようにしたいという僕の思いを伝え、試作の図面を描いたところ、予算を度外視したすごいものをつくってくれた。他にもガラスや金箔、鋳物、家具、織物など、日本全国の光る技が入っています。

贅沢さや豪華さのイメージは、象徴的に皆さんの頭に入っています。すべての部材や備品に既製品を使わず、オリジナルで図面を起こして職人につくってもらいました。「ななつ星」では、デザイン力というよりも、手間暇かけることで、乗る人だけではなく、つくる人も含めた多くの人と感動を共有することができたのだと思います。

宮坂　さまざまな人がかかわるプロジェクトを成功に導くためには、一つの方向に牽引し、まとめ上げていくリーダーシップが重要ですね。

水戸岡　僕はデザイナーとしてものをつくるリーダーではありますが、一番大事なのは、つくるものとサービス、予算、スケジュール、コストなどすべてを決めるプロジェクトリーダーです。夢やあるべき姿を描く力、つくる人と使う人が感動して幸せになれるテーマを生み出す視点です。例えば「アクアエクスプレス」のときに、「失うものは何もない、かつてなかっ

「ななつ星 in 九州」の初期のイメージスケッチ



「ななつ星 in 九州」で移動空間に配置された組子細工(左)と有田焼(十四代 酒井田柿右衛門)の洗面鉢

※有田の三右衛門
有田焼は佐賀県有田町を中心に焼かれる磁器。三右衛門とは酒井田柿右衛門、今泉今右衛門、源右衛門の3つの窯元を合わせた呼称。

たものをつくれ」と指示されたJR九州の石井さんのように、みんなが挑戦したくなる新たなステージを提示できるリーダーは素晴らしいと思いますね。

鉄の可能性、良さを引き出し、「1%」の質を高める

宮坂　水戸岡さんはさまざまな車両デザインに、木をはじめとする多様な素材を採用されています。素材に対する考え方、また鉄についてはどのようなイメージをお持ちですか。

水戸岡　基本的に、すべて樹脂でできている金太郎飴のような量産品ではなく、できるだけ天然素材を取り入れたいと考えています。鉄も天然素材ですよね。「つばめ」が良かったのは、鉄製だったことも大きい。線路の進化も含めて走ったときの安定感というか、乗り心地がまったく違います。「ななつ星」でも鉄職人との協業がありましたが、現在は御社のような優れたメーカーはあっても、職人が減っています。日本の素晴らしい伝統の技が途絶えないようにしたいですね。鉄という素材はもう一度見直される時代が必ず来ると思います。現に日本が培ってきた刃物などの鍛造技術はいまだに世界一です。

宮坂　企業として利益をあげて社員の生活を守ることが前提ですが、利益を追求するだけではなく、私たちがつくる鉄が快適な移動を実現する自動車や、暮らしに彩を添える家電製品となって生活を豊かにするということが私たちの喜びです。お客様のものづくりや製品の使われ方を理解し、品質のみならずその製造工程の最適化の提案にまで踏み込んだ事業活動に取り組んでいます。

水戸岡　同じ鉄でも、最終的に形になる製品やその加工方法に合わせて、すべてつくり分けているわけですね。

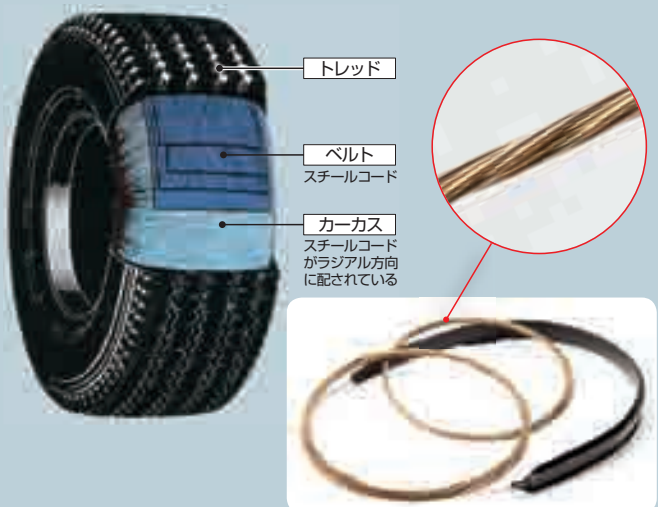
宮坂　はい。鉄はただ強ければ良いわけではなく、溶けた鉄の段階から、これはどのお客様のどの部品に使われるかということが決まっていて、加工性や溶接性などの特性を、緻密につくり分けています。そこに私たちの事業の技術的な面白さと夢があります。成分や温度、圧延の仕方など、鉄の種類は何万とあると思います。あまりにも多いので誰も数えてくれませんが(笑)。例えば、軟らかい鉄と強靭な鉄では何倍、何十倍も強度が違います。実は自動車タイヤの中に入っているスチールコードは強度が非常に高く、直径0・2～0・3ミリのごく細いスチールコードが3本あれば、人間一人を吊り上げることができます。

水戸岡　そんなに種類と特性の幅があるとは驚きです。木は素材として山にあり、誰でも使えますが、鉄はそうはいかない。もちろん直接買う機会もないので知りませんでした。自動車では昔、3種類あったモデルを1種類に絞ったら利益が急激に伸びたという話を聞いたことがありますが、それだけの種類をつくり分け続ける御社の、ものづくりへの気概を感じます。今のお話を聞くとますます「最後の1%」である私の仕事も難しいものだと思います。素材の良さを引き出す、より質の高い1%で、もっともっといいデザインが生まれますし、こうした情報共有は大切ですね。

アイデアを生み出すコミュニケーション能力を磨く

宮坂　先ほどの職人の技術伝承のお話もそうですが、次の世代を育てる人材育成についてはどのように考えていらっしゃいますか。

水戸岡　僕はスタッフを褒めたことがない。うまく



タイヤの補強材として使われるスチールコード。直径0.2～0.3ミリの細線を撚り合わせたコードを、ゴムなどと共に加工してタイヤをつくる

鋼(はがね)をつくる製鋼工程。製鉄所では何万種類もの鉄鋼製品をつくり分けている

できたときは褒めなくても本人が一番よくわかるはずです。若者たちにフェアにチャンスを与え、間違ったときに指摘し、叱咤激励してアドバイスすることがプロを育てる最善の方法だと思います。御社ではどうですか。

宮坂　一人ひとりが自分の持ち場で実力を発揮してほしいと思うなかで、私の経験から、若い人には、失敗してもいいので、できるだけいろいろなことに挑戦し経験を積み、多くの「引き出し」を持つように言っています。それが10年、20年後、自分の仕事の深みとなり、幅を広げてくれます。昔失敗したことでも時代変化のなかで、その経験を活かすべきタイミングが訪れることがありますね。

水戸岡　そのとおりです。それまではつながらなかったさまざまな情報や経験が、あるとき自分の強い思いのなかでつながり、一つの形になるときがあります。だからこそ自分の好きなことだけでなく、嫌いなことも含めて「ポケット」をいかにたくさん持つか。多くの技や色、形を知ると自分が表現する手法や言語も増え、その表現力、言葉で豊かな絵や文章を生み出せます。不都合を受け入れるほど、人間は豊かになっていきます。もちろん最後は情熱がなければ何もつながらないし、生まれませんが。

宮坂　経験知をつなげて新たなものを生み出す情熱が大切ですね。最後に当社社員も含めて、今後の社会を担う若い世代、若き技術者へのメッセージをいただければうれしく思います。

水戸岡　人生では「知・好・楽」の3つが重要です。まず、可能な限りいろいろなことを勉強して多くのことを知り、そのなかで好きなことを見つける。好きじゃないと全力投球できないし、多くの人を楽しませることが楽しいと思えれば豊かな人生を送れると思います。

宮坂　今日のお話を聞いて、そうした考えで生きていれば、人と人の素晴らしい巡り合わせ、出会いも生まれるとつくづく感じます。

水戸岡　五感や目に見えない勘、経験知といった総合力を鍛えると、人に対しても明快に意思や「気」を伝えるエネルギーを持つことができ、心が通い合います。また、技術は基本的にソフトのかたまりです。化学や物理などの専門分野もすべて人間が生物であるという原理原則に基づいている。若い技術者には、そうした観点から技術の本来の面白さを感じ取る感性を持ってもらいたいですね。

宮坂　私は長年、研究開発に従事してきましたが、研究者には実験室へ行け、ものづくりの現場の声を聞いてこいと日ごろから言っています。そうした経験や他者との対話を通して感性や勘が磨かれていくのだと思います。

水戸岡　僕の事務所でも「アイデアを出せ」と言うと、自分の引き出しではなく、インターネットを検索し始める(笑)。アイデアとは対話しながら熟成されていくものなので、コミュニケーション能力を高める努力が大切ですね。

宮坂　本日は水戸岡さんの仕事に対する哲学を伺うことができ大変刺激になりました。当社もつくる人、使う人が喜びを感じ、感動を共有できるものづくりを今後も目指します。貴重なお話をいただきありがとうございました。

(この対談は2014年11月5日、当社南平台公邸で行われました)

水戸岡氏の仕事は幅広い。駅周辺の空間プロデュースも行う。2011年にリニューアルオープンした「JR博多シティ」では、駅ビルや駅前広場全体をデザインした